

## 第1回県西地域活性化推進協議会 会議結果概要

(H25.12.24 10:00~11:30 於：神奈川県小田原合同庁舎3階会議室)

### ○ 開会（政策局長）

#### ○ 知事あいさつ

黒岩知事：皆様、おはようございます。本日は、年末のお忙しい中、この県西地域活性化推進協議会にお集まりいただきましてまことにありがとうございます。私も先ほど、南足柄市長からいただきました金太郎ネクタイを付けて、気持ちは完全に県西地域ということで、この会議に臨みたいと思っています。今年一年、色々なことがありましたけれども、冒頭で「いのち全開宣言」ということを掲げました。そして、健康寿命日本一を目指すということですとやってきまして、昨日、健康寿命日本一を目指すフォーラムを開催いたしました。そして、この「未病を治す」という考え方、これを県民の皆さんとともに、色々な形で議論をしまして、本当にハイレベルな会だったな、神奈川県はやはり凄いな、と参加者の皆様から言っていただきました。そのような中で、「未病を治す」拠点づくりというものを進めたい、それこそがまさに県西地域活性化にとって最もふさわしいコンセプトではないかと、私は確信を持っています。この「未病を治す」という言葉は、非常に古い漢方の言葉で、まだまだなじみがない言葉でありまして、今も「未病」と言うと、それは何のことを言っているのだと言われてしまいます。しかし、説明すると、なるほどそうだなと、超高齢社会を乗り切るためには、そういう考え方というのはものすごく大事だな、とすぐわかっていただけます。これは、私自身がこの一年間体験してきました。日本だけでなくアメリカのハーバード大学へ行って未病の話をしてきましたし、この間、シンガポール、ミャンマー、タイ等々へ行きまして、この未病という概念を説明しましたが、皆さんからなるほど、それはそうだな、凄いなという反応をいただき、一瞬にしてご理解いただける日本発のコンセプトだと私は思っています。では、そのコンセプトを、この県西地域にどんな形で具体的に活かしていくのかということ、私は皆さんとともに様々に議論をしながら深めて、具体の形にしていきたいと思っています。今日は本当に実り豊かな、そんな時間になることを期待しています。どうぞよろしく申し上げます。

### ○ 協議会について（政策局長）

### ○ プロジェクト素案説明（政策局長）

## ○ 渡辺ゼミプレゼンテーション

### ○ 質疑・意見交換

小田原市長：今日は、こういう形で活性化推進協議会を開催いただきましてありがとうございます。まず、当地域、色々な資源をふんだんに持っていますけれども、なかなか、活性化に向けた有効な手立てを統一的なものとして見いだせていないという状況の中、今回、未病という切り口で、この領域の重要性、戦略的な意味を打ち出していただいたということ、これは感謝申し上げたいと思います。今まで、単に体にいいからとか、健康にいいからとか、美味しいからとか、気持ちいいからという、やや抽象的な概念で、この地域の価値というものを訴えることは当然やってきたわけですがけれども、それが今後の日本の高齢化社会の中で、どういいのか、どう有効なのかということ、未病という概念を持ち込む事によって、よりはっきりさせることができる。それを解決することが、今後の地域課題の解決に具体につながっていくんだということ、この未病というテーマを持ち出すことによって、我々としても、はっきり数値化していくこともできますし、戦略的な意味も確認することができるということで、ぜひ、その具体的な取組みを、我々も共々やっていきたいと思っています。そこで、黒岩知事も掲げております「いのち輝くマグネット神奈川」、我々小田原市は、「いのちを大切にする小田原」ということで、「いのち」というものを筆頭に掲げているわけでありますがけれども、この「いのち」というテーマを取り扱う上で、県内はもとより、国内でも非常に恵まれたポテンシャルを持っている県西地域の可能性を伝えていく意味で、本当に価値あるテーマ設定だと思っています。具体的話は、多岐にわたるご提案を今日もいただいていますので、個々に言及するタイミングがなく、また小田原だけでなく、当然2市8町すべての自治体がそれぞれの考え方で色々な取組みを既にやっておられますので、今日は個々の話を私もいたしませんけれども、今後進めていく上での考え方を確認させていただきたいと思って、二、三、ご質問させていただきます。

一点目は、県として、未病に対する取組みを、今日も色々なご提案の中でやっていただいておりますけれども、小田原市もそうですし、南足柄市も、箱根町も、湯河原町も真鶴町も個々の取組みについては、非常に近いもの、恐らく重複するようなテーマというものを具体の事業として持っており、さらに今後の高齢化に向けてブラッシュアップをしていこうとしています。そういう、各市町で取り組んでいる事業と、この未病の取組みで県として推進していく事業との整合を、事業の体制や予算面などで、どのようにすり合わせをしていくお考えなのか、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

二点目は、役割分担として、県でできること、市町でできることを具体のレベルで詰めていくことが必要になってきますけれども、その辺の体制をどのようにお考えかお聞かせいただきたいと思います。

三点目は、オリンピック、パラリンピックが7年後に控えておりますけれども、県のほうでは、当然オリンピック・パラリンピックに向けての全県的な推進ということも当然お考えになられていると思います。ここに向けて、この未病というのは、東京方面に来られた国内外のお客さんを引っ張ってくる上でも非常に重要な要素になると思います。そこで、オリンピック・パラリンピックに向けた推進体制と、この未病の推進体制をどのように整理しているのか、今の段階で結構ですのでご意見をいただきたいと思います。

**黒岩知事：**今回、各市町が実施している色々な取組みを県が全体を括って、未病というコンセプトでまとめようとしているわけです。今まで全くなかったものを突然持ってきているわけではありません。我々の毎日の生活のパターンの中でも色々なことがあって、それぞれ皆さんが、ご自分で少しでも健康になろうとして食生活に気をつけられたり、運動をやっていらっしゃる。これは当然のことですし、それとともに、市町単位でも色々な工夫をされてらっしゃるといことも当然あると思います。それを否定するわけではなくて、県西全体で未病をコンセプトとした時に、それぞれの市町でやっていらっしゃることが浮かび上がってくることを期待しています。これが浮かび上がってくると、あそこの市町ではこんなことをやっている、うちでもやってみようとか、いいものは全部取り入れていけばいいじゃないかということになって、その相互の連携作用の中で、一つのイメージが浮かび上がってくるのかなと思っていますし、また、こういうコンセプトを出すことによって、まだポテンシャルとして眠っていたものが起き上がってくる。そんなこともあるのではないかと考えております。こういうコンセプトで引っ張っていくことは、一つの手法だと思っています。

元々、県西に何かをとずっと思っていた私の思いの中で、県全体を見渡してみますと、県の東の部分には京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区がある。そして、県の中央にはさがみロボット産業特区がある。県の西にも、戦略的な何かを欲しいなというところから始まりました。例えば今、さがみといえばロボット、ロボットといえばさがみと、県央では言っております。この同じバージョンを県西、特区ではありませんけれども、未病の戦略的なエリアということで、未病といえば県西となってきた時に、様々なものが寄り集まってきて一つの大きな新しいコンセプト、具体的なイメージが出来上がってくるということを期待しています。それから、役割分担というのは、自ずと見えてくるのではないかと考えております。県は当然、広域

行政を進める立場にあり、それぞれの市町は、それぞれの住民の皆さんとしっかりと向き合った形で色々なものを進めていらっしゃいます。この連携というものは、きれいな形でやっていきたいと思っています。オリンピックですが、2020年開催ですから7年後になります。7年間あれば色々なことができるのではないかと考えています。2020年になると、必ず世界のメディアがやってきて、今年オリンピックが開かれる日本は今こんな感じですよということをレポートする。その中で、日本の超高齢社会はこんなに進んでいる。でも、それに対し、このような取り組みをして、こんな形になっている、未病という概念、まちづくりと合わせた形の未病、例えば、未病タウンのようなものがレポートされるイメージとして、そこにどれだけのことができるかということ、皆さんとともにやっていきたいと考えています。

**小田原市漁業協同組合：**委員の名簿についてお伺いをしたいのですが、ご案内のように、酒匂川という川は、2市8町のうち2市5町が何らかの形で関わっている川でございます。そういう中で、この川は農業の生産上においても、漁業の生産においても非常に大事なものでございます。その中において、酒匂川の関係者がメンバーに入っていない。この酒匂川については、2市5町の防災の面でも非常に大事な川でございますので、できれば酒匂川の関係者をメンバーに入れていただけたほうがいいのかなど。これは個人的な考えでお伺いいたします。

**黒岩知事：**では、事務局の方から答えます。

**政策局長：**今回、委員をお願いしております36名の方は、第1回目を迎えるにあたって、ご賛同いただいた方でございます。今後、プロジェクトを進めていく中で、ご一緒に取り組んでいただく方や、実施主体としてお願いしていく中で、やはり酒匂川というものが重要で、こういった取り組みをやるという話があれば、協議会は閉ざしたものではありませんので、どんどんメンバーを増やしていきたいと考えております。これからの話し合いの中で、お考えをお聞きして、入れていくという考え方を持っております。

**黒岩知事：**思いがある人はどんどん寄ってきていただいて結構だと考えております。

**南足柄市長：**県西地域活性化プロジェクトは、神奈川県土が均衡ある形で活性化していくという観点からすれば、特にこの県西地域の私どもの懸案、あるいは念願の県の取り組み、あるいは県と不離一体の形で取り組む、そういう状況がやっと生まれてきたかなとっております。先ほどからの知事、あるいは小田原市長の質疑応答、そういったものにすべからくの状況というものが含まれているわけでございますけれども、ぜひ、そういう意味で、均衡ある形での県西地域の活性化を一緒になって、県の大きな政策誘導というか、そ

うした大きな力がないと、個々の市町だけでは非常にパワー不足といいますか、難しさがありますので、今回のこのプロジェクトの立ち上がりというのは非常に期待をしております。そして基本はそれぞれの2市8町の持っている魅力をいかに活用するか、生かしていくか、このことだと思っております。小さな力が個々に何とかしようということでもがいてもなかなか難しかった。でも、今度は広域的な調和の中で、大きな力となって大きな相乗効果を起こすという観点で、まとまって県西地域全体を、そしてまた国内外にこの地域を発信していくと、そういうことだと思っております。我々が一つ一つ取り組んできた諸々の政策というものは当然ありますので、それぞれの地域の魅力を生かす、そして、この県西地域全体を活性化していく、そういうコンセプトの中でぜひとも大きな力となって推進していただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

**箱根町長：**今、知事の方から、京浜はライフイノベーション、県央はロボット特区というお話がありましたが、未病を治すというのは十分わかりましたけれども、他の二つの特区はどちらかという一言で言い表している。これに対し、「未病を治す」というのは少し一般の人が理解をするには時間がかかるのかなと思います。それは、一つには我々の仕事でもあると思いますけれども、もう少し、キャッチフレーズなり、健康寿命日本一をと言われていきますけれども、そうした一言でわかる表現がないのかなと思います。つまり、「未病を治す」という以外にもう少しピンとくるキャッチフレーズなど、わかりやすくこれを浸透させていくためには、少し工夫が必要なのかなという感じがします。未病の説明を聞けば、なるほどもっともだと理解されることですけれども、その辺がちょっとどうなのかなという、不安があります。この2市8町、元々資源にも恵まれておりますし、海、山、川もありますので、そういう意味からすると、自立できる圏域だと私は思っております。そういう中で、神奈川県にとっての県西地域2市8町がどういう役割を果たしていくのか、また、ひいては日本における2市8町、神奈川県内の2市8町としてどうするのかということからすると、まさに先駆的な「未病を治す」という、大いに結構だなと思いますけれども、それにしても少しわかりにくい部分があるなという。これは私の率直な感想ですけれども、これが最後に何に収れんされるのかというと、この地域の特質からすれば一つは観光という部分に収れんされていくのかなと思っております。そこで、「未病を治す」ということの、もう少し具体性を持った副題というか、そういうものがあればいいのかなと、ちょっと私の感想ですけれども、そんな感じを持ったところでございます。

**渡辺慶應義塾大学教授：**病院で患者さんを待っていて治療する、という時代は

もう限界に来ています。皆さんもご存知のとおり、医療費は2011年で38兆5千億円。2014年は、要求だけで42兆円。これは、予想よりはるかに速いスピードで上がっています。それで、2050年には65歳以上人口が40%。75歳以上人口が25%。現在11%ですけれども、これが25%になる。それで、予想されているのが、国家予算のほとんどが医療費で消えてしまい、何もできないというのが、我々の未来であります。この中で、未病という言葉、聞きなれないかもしれませんが、昨日の健康寿命日本一のフォーラムで、厚生労働省の元事務次官の方が、今までの医療政策の間違ひというものを自己反省したということで、私にとっては非常に画期的なフォーラムでした。要するに、今までのパラダイムでこれから日本が成り立つというのは、もう無理なのです。ですから、どうやってこの日本を生き延びさせるかという時に、この未病が大変重要なのです。まだ、言葉としては未成熟です。しかし、この地域において未病のモデルを作るということが、ひいては日本のみならず世界で進んでいく高齢化のモデルになるという意味において、私は未病という言葉をぜひとも県西から発信していきたいなと思っております。

**黒岩知事：**未病という言葉がわからないということは、元々色々な方からご指摘をいただいておりますが、私は、それを踏まえた上で、あえて確信的に未病という言葉で行こうと思いました。何だろう、となった時に、辞書を見るとなんとなくちょっとわかるかなと。未然の未に病と書いてありますから、病気とちょっと違うのかな、病気のちょっと前かな、という。なんとなくイメージがわかる。「未病を治す」というと、治すとは要するにどういうことかな、とまたわからなくなるのですが、あまりわからなくてもいいと思っております、何か気になる、これは何かという時に、わかった瞬間にストーンと来るという感覚です。皆さんにお配りしました素案の3ページ、「未病を治す」とは、と書いてあるところを見ていただきたいのですが、結構難しく書いてありますけれども、私自身が色々なところでお話をする時に、「健康」「未病」「病気」というこの絵を使っております。ここにはありませんけれども、実はもう1個絵を用意しております、それは、健康が真っ白で、真ん中で分かれて、右側が真っ赤な病気。健康と病気、こういう概念をまず示します。例えば会場で、皆さん健康ですかと聞くと、多くの人が手をあげます。完全に健康ですか、と聞くと、手をおろします。では、病気ですか。いや、病気でもないけれども、という、そういう感じの中で、未病という考え方がある。それはこちらですと、この下のグラフを見せると、皆さん大きくうなずきます。ここからここまでは病気で、ここからここまでは健康とかではなく、なんとなく具合が悪いと、これが未病という考え方です。どの段階にいても「未病を治す」ということは、未病の段階から健康のほう

に少しでも少しでも持ってこようとする事です。そのためには、病気になったら薬を使うのではなくて、食のあり方や運動などのライフスタイルを見直すことによって、少しでも健康に戻していく考え方で、という話をする、ああなるほど、そういうことかと理解されます。アメリカ人にもわかるかなということで、ハーバード大学へ今年5月に行ったのですが、未病ということ、まず英語でどうやって話をしようか。いくら探してもぴったりの言葉がありません。Pre-diseaseとかいう言葉で行こうかなと思ったけれども、何かちょっと違うなということで、この絵を用意しました。逆に言いますと、この絵はハーバード大学の学生に理解してもらえるようにしようと思って未病というコンセプトを絵にしたものなのです。その時の言葉は結果的には、「ミビョウ」にしました。ME-BYOでミビョウ。それで話をしたところ、多くの学生がなるほどそうかということになりまして、これで説明すればわかるということを確認いたしました。結果的に、その後ハーバード大学のパブリックヘルスのコースに日米未病プロジェクトといったものが実際にスタートいたしまして、そのコースに未病という言葉が根付いてきました。こうしたこともありますので、今はまだよくわからないということがあるけれども、これを逆手に使って、未病という言葉を広めていこうと思っています。これを日本発の、神奈川発の言葉として、未病を世界ワードにしていこうということで考えています。色々なご意見があると思いますけれども、「未病を治す」、そして、サブタイトルで言ったら「健康寿命を伸ばしていこう」、「健康寿命日本一を目指す」とか、こういうものをつけてくると、一つのイメージが伝わってくるのかなと思っています。

**開成町長：**先ほど、知事から「ME-BYOタウン」という話が出ました。開成町は来年の春には大井町との橋もつながり、その先には、南部地区で今、区画整理を26ヘクタールやっております。夏にはすべて完成する予定ですので、新しいまちをそこにどうやって作っていくかという時に、「ME-BYOタウン」という名前がいいかどうかは別として、ヘルスケアとかスマートタウンなど、もっと広く捉えて、環境にやさしいまちを作りたいと考えています。そういった中で、そこに早く住んでもらうために、今、町として、再生可能エネルギーも含めたエネルギー関係や防災関係をセットにして家を建ててもらえれば補助金を出したらどうかなという研究をしています。そういった中で今回、エネルギーの関係が、案の中に入っていないと思うのですが、そういった時に、開成町の補助金プラス県もそれに合わせて、この「ME-BYOタウン」ではないけれども、やっていただければなという。今後、予算的なものとして、どのように考えているのかお聞きしたいと思います。もう一つエネルギー関係で、今、我々の近辺で、大井町、中井町でメガソーラーを進めようとして

います。開成町でも、小水力発電機を来年の秋には設置をしたいなという準備をしています。あじさい公園の前のところですが、できれば、エネルギー関係も含めて、健康、環境も含めて未病に含めればどうなのかなと思っています。この中にエネルギー関係が入っていないので、その辺の関係をちょっとお聞きしたいと思います。

**黒岩知事**：未病という括りの中では、エネルギーの問題は直には入りませんが、未病をまちのコンセプトの中で全部まかなう必要はなくて、再生可能エネルギーとか、エネルギーのスマート化といったものと、未病のイメージをドッキングさせて一つのイメージを作っていただくというのが一番良いのではと思います。未病ということで、それぞれ皆さんが工夫をされて、そのコンセプトをうまくそれぞれの地域なりに生かしていただければいいかなと思っています。今おっしゃったその新しいまちというものが、先ほどの話にもありました、2020年に東京オリンピック、パラリンピックが開催され、世界中のメディアが来て、その時の日本をレポートするといったときに、新しいまちというのは十分取材に値する要素です。では、どんなまちだったら世界に向けてレポートできるかということ想定して作っていくということだと思います。だから、エネルギーの問題でのまち、環境にやさしいまちでやっている、それはとてもいいと思いますけど、そこに未病のコンセプトを入れた時にどんなまちが出来上がるかということをぜひイメージしていただきたいと思います。例えば、未病が生活の現場でチェックできる家で、そこに住んでいる人がちょっと具合が悪くなってくると、すぐ人間が介在してきて、こうしたほうがいいですよという話ができる。住んでいるだけで未病から健康へということが実践できるような家であり、しかも、エネルギーもある種自立型、極端に言えば送電線とつないでいない。ソーラーパネルがあって、それを蓄電池に溜めて夜も使い、ガスコジェネレーションでガスを自宅で電気に変えて、また熱も使って、全体をHEMSでコントロールする。電線とつながってなくてもエネルギー自立型であってしかも住んでいるだけで未病がチェックされて、具合が悪くなったら色々な形でそれを解決してくる。これが一つの家だけではなく、全部そうなったまちというコンセプトになった時に、日本のスマートタウンというのは、ヘルスケアと再生可能エネルギーというものがここまで来ているとあってレポートしてくれるに違いないと思っています。だから、そういう新しいコンセプトをぜひ作っていきなと思っています。

**渡辺慶應義塾大学教授**：今の知事のご要望は、ちょっとハードルが高いかなと思って聞いたのですけれども、未病とまちづくりはものすごく関係しています。実は、もう医療を医療だけで考えるという時代は終わっています。今の

まちは大体車を中心に作られています、高齢の方が道を歩いて何かをした  
いなというまちづくりがなされていないのです。あちこちで健康体操とかや  
っても、結局来るのは健康意識の高い3割の人が限度。7割の人が無関心。  
この7割の人たちがどうやって運動して、もしくは社会的な活動に参加する  
かという工夫が、まさにこれからのまちづくりだと思っています。色々なま  
ちでやっていますが、繁華街では車の乗り入れを禁止して、公共系バスなど  
で来て、まちの中は歩いて回る。そこでイベントをやって、高齢者に家から  
出てきてもらうというようなことをやっていますけれども、健康チェックの  
色々なスマート方式というのは、非常に魅力ある、知事の将来像ではあると  
思いますが、もっと身近にできることとしては、車ではなく人に優しいまち  
づくりということが、イコール未病対策になりますので、まずは人が外に出  
て歩けるというまちづくりをお願いできればと思います。

**真鶴町長：**知事、県西に目を向けてくれてありがとうございます。今まで横浜  
とか川崎とか、さっき話したとおりがみの中央とか。やっと県西に目を向  
けてくれました。県西地域に元気がなければ県の元気はない。県が元気なけ  
れば日本の元気はない。ということは、元気の源はこの自然がいっぱいある  
県西地域なんです。そこで、一つだけお聞きしたいと思います。定住人口と  
いう話が先ほどありました。この2市8町で、未病を使って出生を上げるこ  
とはないでしょうか。子どもを増やす。これが全然うたわれていない。それ  
がなければ県の人口はアップしていかないと。その辺はどうでしょ  
うか。

**黒岩知事：**それは、それぞれの地域の工夫によって、色々な形でやっていただ  
きたいと思っています。今、我々があえて焦点を絞っているのは、超高齢化  
といったところです。だから、長生きしてくださるのはいいけれども、なる  
べく健康な状態で長生きしていただきたい。そのために、それを少しでも伸  
ばせるように、ありとあらゆる政策を総動員してやっていきたいと思います。こ  
ういふ話をしているわけです。では、これは少子化対策につながるのかとい  
った時には、それをつなげていく努力を当然しなければならぬ。具体的にどう  
するのかといったときに、住みやすいまちとか、行って楽しいまちとか、皆  
さんがニコニコして、ご老人がみんな朗らかに、健やかに住んでいる、あ  
そこはいいよねっていう、そういうイメージを作っていくことによって、若  
い世代も入ってきて、まちのにぎわいが出てくる、そういうことも期待して  
います。

**湯河原町長：**オール県西という、この会議、第1回目ですが、期待を肌で感  
じています。一つ渡辺先生にお尋ねしたいのですが、非常に素朴な質問で、  
高齢化と未病という概念は、比例をするのでしょうか。未病という数値は  
掴みにくいのですが、高齢化が進むと、この未病のゾーンが増えていくと  
か、単

純に比例するのでしょうか。また、そうではなくて、若くても未病という状態に陥る状況になる。まず、このことはどういう理解をしたらよろしいでしょうか。

**渡辺慶應義塾大学教授：** だいたい、病気というのは発症の20年前から始まっています。アルツハイマー病にしても、脳の異常が起こるのは20年前です。ですから、高齢化というものと、未病というものが密接には結びついている。ただ、ここで皆様をお願いしたいのは、これからの超高齢社会をどう乗り切るかというときに、高齢者だけではなくて、やはり若者が自分たちの健康を楽しめるという社会にしないと、日本の社会は持たないということです。もちろん高齢者が対象ではあるのですが、若者にも魅力があるような、若い時代から健康を意識して、楽しく、車に頼らず歩けるような、そんなまちづくりとか社会というものができれば、県西のプロジェクトは成功ではないかと思っております。

**湯河原町長：** そこで湯河原町としては、様々なプロジェクトがこれから進められる中で、すべて重要な事だと思っておりますが、やはり未病の見える化ということには、個人的には非常に期待を持っております。なぜかと申しますと、湯河原の話をして大変恐縮ですが、今から120～30年前、日清・日露戦争の時代には、戦地から戻ってきた方たちが、湯河原のお湯が傷に良いということで傷を癒したという歴史があるようで、湯治、湯で治すという言葉はそこにあると思うのですが、このように湯河原温泉は保養地という歴史がございます。例えば傷が癒えていくという外科的なものは、素人でも本人でも、目でもわかったり、他人からもわかるわけですが、内科的な病気や今特にそういう方が多い精神的なものも含めて、なかなか外側からは見えづらいものです。そこで、未病の見える化というものを、ぜひ学生たちの力も借りながら、本人がチェックでき、また、そのような概念が普及することで未病という一つの概念が統一されていくのかなという期待もありますので、ぜひ推し進めていただきたいと思っております。2市8町の魅力として、地域の長い歴史の中で、医学が進んでいない時代に、もしかしたら未病に対する知恵があったのかと思っておりますので、知事のごあいさつにもあったように、それを掘り起こし地域が再度、気がつく動機付けというものもとても重要と思っております。このことをぜひ上手にまとめていただきたいと思っております。そして、メディアの活用は、知事に非常に熱く語っていただいておりますので、お任せするにあたって、地域の知恵を掘り起こしていくというのは、一つキーワードとしてあるのかなと思っております。一つ思いをお話させていただきまして質問とさせていただきます。よろしく申し上げます。

**黒岩知事：** 前段の方ですね、高齢化と未病の数が比例するのかなという話ですけ

れども、未病というのは、もう一回この絵を見ていただくとわかるのですが、健康がグラデーションで病気に入っていくという。どこからどこまで未病なのかということは、実はありません。ですから、病気の中にも未病があるということです。未病という考え方というのは、どんな重い病気の中でも、少しでも食べられるようにしようとか、少しでも動けるようにしようとかという考え方、それが未病という考え方なのです。あなたは未病ですよ、あなたは病気ですよ、ということではない。それを、できるだけ皆さんの未病の状態をどこにいるかということのをうまく把握して、それを少しでも健康に戻していくために、ありとあらゆる方策でやっていきたいということです。今湯治という言葉が出てきました。それから、養生という言葉。要するに、病気になって病院で診察や診療を受けて、薬をもらって何とかするという事だけではいいということをはっきり言っているわけですね。その時に、まさにおっしゃった湯治とか養生という言葉が、我々がよく知っている言葉の中で、一番近い考え方だと思います。養生は、体をゆったり休めて、温泉に入っているんびりして、静かに時を過ごして、そして、食のあり方によって地産地消のものを食べて元気になっていくというのが、昔ながらの養生ということです。元々、温泉場にはこのパワーがあったわけですね。これを、今のこの時代にもう一回光を当てたいということだと思います。今、温泉地というと、観光客がやって来て、1泊や2泊で慌ただしくお風呂に入って、宴会をして帰っていくということで、それも楽しいですけども、やはりじっくりと腰を落ち着けて、自然の中に身を委ねて、自分の日常と切り離された中で、しっかり養生していくという。こういうものが日本の歴史、文化の中にちゃんとあったわけですね。こういうものを、いきなり養生と言ってもなんだ古臭いなと思われるかもしれないけど、「未病を治す」というコンセプトの中でまとめあげた時に、新しい響きが出てくるということも実は期待している、そういうことだと思います。

**山北町長：**今回、「未病を治す」色々なプロジェクトの説明を聞いて、私としても非常に期待しています。特に私からお聞きしたいのが、慶應義塾大学の学生さんに発表していただいた中で、未病対策を実現する二つの方法として、「生きがいの創出」と「健康意識の増進」の話がありました。「健康意識の増進」を図り自分の体を知るということは、県の「未病を知る」という考えと合致すると思います。一方「生きがいの創出」についてですが、当町でも「未病を治す」取り組みとして森林セラピー体験ツアーや足柄茶のPRなど色々なイベントを行っているのですが、高齢者に参加していただくことが難しい状況にあります。高齢者にイベントなどへの参加を促すような具体的なお考えがございましたら是非、お聞きしたいと思います。

**慶應義塾大学学生：**高齢者の方をどうやってイベントにお呼びするかということについて、我々も何回も考えました。やはり人に会いたいとか、こういう趣味があって、そういう思いを共有したいという思いで、人は外に出てくるのではないかと考えております。だから、例えば、里孫制度として、子供、孫がいない人には里孫、違うお子さんと交流してもらって思いを共有していただくような、そういう温かいイベントで高齢者を招くということを考えております。そこには、ちょっと足が不自由であったり、障害がある方をどのようにお招きするかなど、まだまだ課題がたくさん残っていると思っておりますが、そのように考えております。

**黒岩知事：**ありがとうございます。渡辺先生いかがですか。

**渡辺慶應義塾大学教授：**本当に学生が色々と考えてくれています。学生の強みというのは色々な情報発信の能力が高いので、是非とも学生を使っていたければと思います。それから、なぜ老人クラブが高齢者は増えているにも関わらず参加者は減っているのかという話ですけれども、老人会に聞くと自分が減入ってしまう。減入ってしまうというところが、やはり問題かなと思っていて、我々が考えています世代を繋ぐという意味では、自分たちのためになったというよりは、むしろ若い人たちに何かを伝えるという、自分が必要とされるというところを掘り起こしたいと思っております。そういった高齢者の知恵、知恵袋を逆に若者も活用するというような、世代を超えた繋がりという仕掛けを、まだ具体的にはお答えできないのですが、色々と仕掛けたいなと思っております。

**黒岩知事：**ありがとうございます。先ほどの学生さんの発表の中で、なるほどと思ったのはまさに今、渡辺先生がおっしゃったことであって、老人、超高齢社会になってくると色々なハンデを背負ってらっしゃるわけだけでも、強みを持っている。若者が全然持っていない強みを持っている。若い人たちというのは元気だけでも、老人が持っているものは持っていない。だから、それを共有し合うとお互いに役に立つ。WINWINの関係ができるだろうという、この発想はすごく面白い。「おじいちゃん、おばあちゃんの持っているものを教えてよ」と若者が来る。それをIT技術によって色々な形によって広めていくという、そういう組合せを作っていきましょうという発想。何とかした方がいいですよ、しなさいよと言っても人間はなかなか動かない。やはりそこに行きたくなる、若い人がいてくれて私が言っていることをメールで打ってくれるとか、インターネットで目の前で何か出してくれる。「おじいちゃん、おばあちゃん、戦争の時のどうなのあれ。インターネットにこう書いてあるよ」みたいな話をしながら、何かそこで交流が生まれてきたりすると行きたくなるというか、そういうことが続いていくためには若い感性が、す

ごく大事なことではないかと思いました。

**小田原箱根商工会議所：**コンセプトの「未病を治す」ということを十分に私は理解させていただいたと思っております。その上で思ったのが、この2市8町それぞれにあって色々な取組みを、色々な地域ごとにされているわけですが、それを今回「未病を治す」というひとつのキーワード、キャッチフレーズをもってして、もう一回ブランディングしていこうということではないかなと私は理解いたしました。その上で、順不同ですが四つほど意見といたしまして、コメントをさせていただきます。

一つ目は、先ほどから出ています「見える化」でございます。先ほど湯治とか養生という言葉が出ましたけれども、温泉に入るのは体に良いと思っ

ているわけですが、どうして良いのかというのはたぶんほとんどの方がわかっていらっしやらないと思います。まさに未病というなんとなく調子が良い、なんとなく調子が悪いということ、先ほどの最先端のヘルスケアを使って、どれだけできるかわからないですけれども、是非「未病を治す」の裏側に、きちっとデータを示していくことが必要かなと思います。今の人たちはほとんど頭で考えますので、そういうものがあつた方がわかりやすいのかなと思

いました。

二つ目は、この案を拝見させていただいて、知事は盛んにメディアの話をされたわけですが、以外とこの中にはメディア戦略の話が言葉として出てきてないなということが、一つ気になりました。やはり、色々なメディアを、先ほど若い方たちの話も出ましたけれども、SNSも含めた、そういう色々なものをミックスさせたメディアミックスというものがきちっとした柱として必要かなと思

いました。

三つ目が、少しマーケティング的な話をすれば、ターゲットを少し明確にしていかななくてはいけないかなと思

いました。外からきていただいて観光で数日間楽しんでいただく場合と、それから先ほど出ていましたけれどもまちを作るんだと、住んでもらうんだというのはターゲットが違ふと思

いますので、その辺をどうやって整理するのかなというのが疑問として思

いました。

最後に、やはり顔の見える関係というのがすごく大切だなと常々思っているのですが、例えば、県西地域でこういうところが良いんだよというときに、こういう食べ物があります、こういう施設がありますということに加えて、こんな人がいる、こんな人がこんなことをやっているという、そういう人たちが何か、その人がストーリーとして、テラーとして出てくれるような仕掛けが必要かなというのが一点と、もう一つが、先ほど、おじいちゃんとおばあちゃんと孫の話が出ましたけれども、やはり一回きりの関係ではなくて、継続的に繋がっていけるような関係を作っていく。要するに人と人とを繋い

でいくような仕掛けというのが必要ではないか。例えば、一回きりの観光、温泉、湯治が良かったねという話ではなくて、先ほどから何度か出ているかも知れませんが、あそこに誰々がいるから行く、とか、それから、そういうものを今回、実は東日本大震災の際の色々な支援の時にすごく思ったのですが、顔が見える関係を普段どのくらい作れているか、自分の地域と、自分の地域ではない他の地域の方たちと、他のグループの方たちとどれだけ個別な顔が見える関係を作っていくかというのがすごく大きな要素だと思います。これはまさにまちづくりの話であり非常に息の長い話だと思いますので、そういう意味ではいかに県西地域の人々、そこを利用してもらう、あるいはそこへ来てから私どもと顔の見える関係をどう作っていくのかということをは是非考えていかななくてはならないのかなと思いました。

**黒岩知事：**なるほどというご意見でありました。冒頭の温泉がなぜ良いのかということは何となくではなくデータとしてちゃんと示していくということ。これはまさに、ここでしっかりとやっていかなければならない大きな重要な課題だと思います。「未病がわかる」というプロジェクトの中では、かなりその科学的な、そういった分析といったものもイメージしています。昨日の健康寿命日本一のフォーラムでも実はそういった話になっていたのですが「未病を治す」コンセプトは非常に良いが、それが本当にどう良いのかということをやっぱり、今この時代ですから、科学的に証明していくということはやっていかなければいけないだろうと思います。先ほどの未病のグラデーションを、ちゃんと科学的に証明していくということ、こんなアプローチをすれば、このレベルからこんなところにきたというデータをどんどん集積して行って、それを見せて科学的なものにしていくということ。これがあってこそ世界に向けて本当に発信していくコンセプトになっていくと思っております、ただ単にこのエリアを観光地としてもっとブラッシュアップしましょうとか、何となく、そういうコンセプトで住みたいなと思うエリアにしましょうということだけではなくて、科学的な分析を行うエリアにしていくことも大きな課題の一つと思っています。

メディア戦略の話ですが、確かにこの今まとめた中ではメディア戦略には非常に弱いというか、具体的にどうだというのはまだ書き込んでおりません。その辺りはこれからの大きな課題として受け止めていきたいと思っています。

ターゲットの話ですが、我々が今、ご提示しているのは県西部で未病というのはどうでしょうかという話ですけれども、県西部は大きなエリアでありますから、それぞれのエリアごとにターゲットは違っていいのではないかなと私は思っています。我が町はこういう世代に向けて行きます、我が町は外国人に向かって行きます、そういうものでもいいと思っています。そうい

う中で全体の多様性が出来上がったところで、本当の魅力が更にアップしてくると思っています。

顔の見える関係が非常に大事だという話ですが、まさにそのとおりです。こういう動きの中で「未病と言えば、あの人」みたいな人が次々と出てくるということ。あの人のところに行くと何か未病を癒される感じがするだけで良いと思います。やっぱりそういう人を発掘しながらキャンペーン的にやっていくというのも、この魅力アップのためには非常に有効な手段だなと思いました。

非常に貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。あっという間に時間が過ぎてしまいましたけれども…。では最後に。

**渡辺慶應義塾大学教授：**今のご発言に対して、そういうソーシャルメディアの発信ということこそ是非とも学生を使っただければと思います。

**黒岩知事：**ありがとうございます。本当に、まだまだ皆さんとともにご意見を交換したいところでもありますけれども、まだ今日は第1回目ということがあります。こんな形で考えているというのを、まずは皆さんがそれぞれの市町、それぞれの団体等々で、意見を膨らませていただいて、こんなふうにしよう、あんなふうにしようという提案型で、また次の回に向けて進めていって大きなうねりにしていきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

○ 事務連絡（政策局長）

○ 閉会